

「目連救母変文」の呼称法

砂岡 (鈴木) 和子

On Personal address in “Mulien Jiumu Bienwen”

Kazuko SUNAOKA (Suzuki)

I would like to try to research on personal address in ballad “Mulien Jiumu Bienwen”, which was in vogue during Tang dynasty. Personal address play a very important parts in actor’s lines structures of Bienwen.

This paper deals with the Hell, Stein no. 2614, the recto copied in the 7th year of Zhen-ming (貞明), A. D. 921. which discovered in Dun-huang.

The following points are the focus of this work.

- 1 : This ballad’s narrator regularly uses discourse verbs and personal address, when he quoting direct speachs.
- 2 : More personal address are used than personal pronouns, which are only 25 per cent of personal address.
- 3 : The personal address on his title or post 「職位名詞」 is more employed than the address according to his feudal ethics 「人倫名詞」 in convesatinal styles.
- 4 : The Third Person and Indefinit pronoun are not yet separated from Demonstrative.
- 5 : Much First Person and Second Person are used with feudal ethics personal address, but not used alone.

1 はじめに

- 1・1 「目連救母変文」について
- 1・2 伝統芝居のせりふ機能
- 1・3 伝達動詞と呼称

2 人称代名詞

- 2・1 一人称
- 2・2 二人称
- 2・3 三人称
- 2・4 不定称

3 身分呼称

- 3・1 人倫名詞
- 3・2 職位名詞

4 小結

1・はじめに

- 1・1 「目連救母変文」について

本稿は敦煌本「大目乾連冥間救母変文」(本文では以下「目連救母変文」と略称)¹⁾のせりふに現れる呼称について報告する。同時代の近世口語文献に見える呼称法については、既に呂叔湘1985、金岡1978に指適がある。拙稿は仏教説話系変文における使用状況の個別報告となろう。目連変文抄本に見える呼称をデータ分析し、口誦文芸作品としての特色を通時的に位置づけるのが当面の目的である。せりふの呼称法は、文芸形態や文体と深く関連する。本稿はまた、当抄本を手始めに、敦煌変文のせりふの言語的特色と構造を記述することを、近い将来の目標としている。

まづ初めに、目連救母説話について簡単に紹介しておく。本故事は目連尊者が地獄に落ちた母を救う説話「仏説盂蘭盆経」に由来する仏教説話で、²⁾唐代倫理思想最大の徳目である孝道を主題とし、仏教の

年中行事、中元盂蘭盆会の法儀に欠かせぬ題材でもある。小論が対象とする敦煌本「目連救母変文」は本説話系初期の作品に属し、現存する中で最も長編かつ首尾完全な抄本s.2614³⁾を含み、変文作品中の雄編と目されている。数種ある抄本の成立年代は推定10世紀。本文で引用する例文理解の便に、筋書きを簡単に紹介する。

目連(幼名羅卜)の母青堤夫人は慳貪の罪を犯して阿鼻地獄に落ちる。目連は釈尊のもと修行に励み、神通第一を得て天宮に父母を捜す。父に巡り会い、母が地獄に落ちていると聞かされた目連は、南閻浮提に下り母を尋ね地獄を巡る。阿鼻地獄に落ちたとの消息を得るものの、法力が足らず阿鼻の嚴重な扉は開かない。釈尊に助けを乞い、錫杖の魔力で母との対面にこぎ着けるが、変わり果てた母の形相に悶絶する。身代わりを申し出る目連に、因果応報の掟を盾に拒否する獄主。なすすべなく再び釈尊に泣訴し、母を飢餓道に移したのも束の間、母は貪心改めず、息子の差し出す飲食も猛火に変じて喉を通らない。釈尊の導きで7月15日盂蘭盆供養を行い、飢餓道から母を黒狗に転生させる。更に七日七夜の經典転読によって女人に戻った母は、忉利天に生じ快適に暮らす。

時の流れと共に、物語の主題は当初の仏法信仰や孝道から、因果応報・地獄思想へと移り、民衆に深く説話の根を下ろして、戯曲・芝居また絵画や説法の素材として中国本土のみならず、モンゴル・朝鮮そして日本に伝播する。目連救母説話の魅力は、物語構成のスケールの大きさと、リアリズム表現にあらう。恐怖の地獄描写、天界と奈落を駆け抜けるスピード感、欲望に溺れる母親、反倫理的な因果応報の裁きといったテーマは、孝道倫理と仏法帰依が主流の当時であって、解放感とスリルをほらむ題材であったと想像できる。

敦煌本「目連救母変文」は、文体・用字が荒削りの難はあるが、初期説話のリアリズム描写に秀でて、宿命にあらがう目連と母の葛藤をいきいきと今に伝える。変文は本来、仏教伝導のための説話台本で、散文・韻文の交錯する“唱白体”と言われる文体で綴られている。唐、五代には寺院を舞台に演じられた俗講といわれる寄席が盛んで、そこで演じられた説教台本が狭義の変文である。⁴⁾変文には本来、絵説

き用の変相図が付録していたとされ、当時の口語散文でストーリーを一段講じたあと、「～の処をご覧あれ」の決まり口上とともに、場面が変相図(絵とき用の掛け図、絵巻または壁画)に変わると、講釈師は口調を韻文に変え、前段を重複敷衍しつつ絵説いた。

小論が分析対象とする「大目乾連冥間救母変文」抄本s.2614も⁵⁾、元来変相図と伴に講じたむね記録があり、絵説き文一段を継ぎ足した痕跡も原巻に残る。⁶⁾手抄本のため、書写後の削字・補字・返り点など校正の跡が明白で、校正はせりふ箇所に見出し、かつその扱いは細心である。本抄本を講唱体文芸の口演台本、もしくは台本を比較的忠実に反映した抄本とすることに異論はあるまい。

「目連救母変文」は発見以来、仏教・文学・語学の専論著が多く、校勘も数種類ある。⁷⁾これらによって、敦煌資料につきものの難渋な字句や語彙の解説は進展を見た。しかし作品全体の言語構成に関しては無頓着な校注が多い。例えばせりふの処理は校訂テキスト間の異同が大きい。特にせりふの出だしをどこにするかで、標点符号(句読)の付け方が諸本で異なる。

筆者は本文をまとめるに先立ち、「目連救母変文」に現れるせりふをすべて抽出して、タイプ別に分類する基礎作業をおこなった。この結果、当変文のせりふの出だしを特徴づけるのは次の2点であると考える。

- 1: {A啓言B…} (AがBに申しあげよう“Aのせりふ…”) に代表されるせりふ引用時の定型伝達動詞句
- 2: BまたはAのせりふ“…”中の呼称の使い分け

せりふ校定の誤りの多くは、地の文であるべきBをせりふ冒頭の語と誤解、或はその逆のケースである。⁸⁾後述のように、呼称は直接呼称と間接呼称で語彙を異にする場合が多く、呼称法の分析は口誦文芸のせりふの型を知り、せりふ出だし確定の足がかりとなるはずである。

変文のせりふの型を明確にすべく、第一歩として、敦煌本抄本s.2614「目連救母変文」を資料に取り上げ、語学的視点からせりふの呼称法を分析してゆく。上記1の引用定型伝達動詞句については、紙幅の都

合上、一部を除いて割愛せざるを得なかった。後の機会に譲ることにしたい。

1・2 伝統芝居のせりふ機能

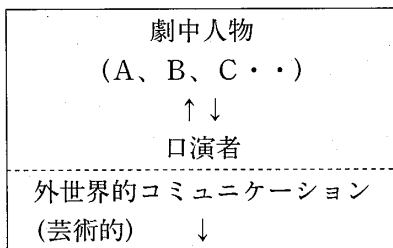
敦煌本抄本s.2614は、字数にして約9300字、長講一時間余の語り物と考えられる。⁹⁾説教の生台本に近く、口演当時の状況を窺知る上でも貴重なテキストである。当抄本は、後世読物として成熟する諸本と比較べ、登場人物のせりふを韻白双方とも豊富に含む。

ここで、中国の講唱体文芸の「せりふ」の特色を西洋型近代演劇のそれと比較したい。

中国の伝統芝居の「せりふ」は、西洋型演劇のそれと異なる。西洋型演劇のドラマは劇中人物のせりふの応酬で進行する。これに対し、講唱芸能およびその系統を汲む中国の戯曲では、登場人物のせりふは口演者によって間接に聴衆に伝えられ、劇中人物は直接喋らない。登場人物がまませりふを述べ唱うことがあっても、相互応酬は稀で、観衆への独白、あるいは狂言回しの口上を兼ねている。本論で扱う変文のせりふの型も、伝統芝居のせりふ機能と密接な継承関係がある。

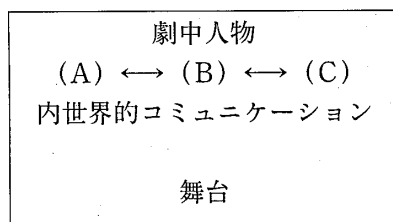
東西芸術形式にみられる劇中人物と、観衆および狂言回し（口演者）の関係を簡略に図式化すれば、以下のように対比できよう。¹⁰⁾

戯（変文、話芸）



観衆

劇（西洋型ドラマ）



芸術的コミュニケーション

↓
観衆

西洋型ドラマのせりふが、劇中人物間の内世界的コミュニケーションを主な機能とするのに対し、中国伝統戯のそれは観客との直接コミュニケーションを主にする。聴衆は演者（狂言回し）による間接のせりふを、自分たちへの直接メッセージとして聞き直す。西洋型ドラマでは、舞台上に展開するせりふの世界から、観衆が芸術的メッセージを感じ取り、芸術世界を創出するのに対し、伝統芝居では口演者が、ストーリーや劇的感動を直接伝達する。彼は舞台と観客（聴衆）を繋ぎ、劇的感動の大小は、語り部の力量如何にかかっている。

変文の場合も、せりふはドラマ進行の主役ではなく、口演者によりストーリー中に呼び込まれる間接の「せりふ」である。登場人物が多数の場合、聴衆が配役を混同しないよう、しかも劇的効果を挙げるにはどうしたらよいか。「目連救母変文」の文体は、直接話法によるせりふ引用と呼称の多用が、話りの効果をあげていることを教えてくれる。そして直接話法と呼称の多用を保証するのが、せりふ引用時の定型伝達動詞句と、多様な呼称名の存在である。

1・3 伝達動詞と呼称

変文のせりふが、その演出形態から一定の型をもち、定型伝達動詞句によるせりふの直接引用と呼称の多用が2大特徴であることを述べた。せりふは口演者の口上の一部として挿入され、引用の都度、伝達動詞句が先導し、せりふは直接話法を主にする。「目連救母変文」のせりふも {A啓言B (AがBに申しあげるよう): “Aのせりふ”} という定型で現れ、演者がAやBを紹介する。さらにせりふ中でAは自らを名乗り、頻繁にBの名を呼ぶ。前者を定型伝達動詞句、後者をせりふの呼称と呼ぶ。

「目連救母変文」に見える伝達動詞は、筆者の分類によれば、以下の5タイプに大別できる。()内は変種

- | | |
|-------|---|
| a 報告型 | 啓言、喚言 (喚言、喚) |
| b 上申型 | 白言、諮白 (諮) |
| c 見聞型 | 問言 (問曰、問曰、問語、又問、問詢、問己、尋問、問、卒問、借問、問処、問~之処) |
| d 返答型 | 報言 (報~言、報言~之処)、 答言 (答言啓) |
| e 雑類 | 哭言、哭曰、称言、直言、勸言、 |

以上の伝達動詞に導かれるせりふの数は、全せりふ数120句中の7割強を占め、せりふと定型伝達動詞の結びつきの強さを示している。せりふ伝達動詞句は変文に限らず、古くは論語の「子曰」に始まり、説話・講談・地方劇に共通の型であるが、変文類は伝達動詞句のタイプが多様化し、出現頻度が高い点に特徴がある。語法の文化的・伝統的要因に加え、魏晉南北朝以来、大量に漢訳された仏典・仏教系の故事・禅語類が、問答体を採ることとも関連があるであろう。

引用せりふがダイレクトスピーチなのは、中国語が間接語法の成立しにくい言語構造のためでもある。間接語法表現に必要な、例えば時制・動詞・人称などダイクシスの変換は、中国語の構造に適していない。¹¹⁾語法転換に有用な第三人称代名詞も、後述の如く、この時代に至っても発展が極めて遅く、モダリティ表現も唐宋代には未成熟である。勢いせりふは直接語法かそれに近い形で引用せざるをえない。変文や講唱文芸のように聴覚に頼る芸術は、人物の一言一句、一挙一動を根気よく一人称で語り継ぐほうが、虚構にリアリティを与えることができる。

例えば次例1) 2) の下線部は遠称や三人称への変換を行わない。

なお本稿に引用する原文は、項楚1989、郭在貽1990、入谷1975日訳を参照し、校勘を()内に示す。この3著は「目連救母変文」を含む変文の校勘中、現在までで最も精緻な校本といえる。標点を含め筆者が訂正する場合はそのむねを記した。字体は特殊字体を除き標準字体とする。数字は項楚1989の頁数。原巻は句読点・引用符号を打たず、一部韻文の改行と散文の段落分けが見える。本稿の引用例文では、上掲諸校本に準じて句読点等を加え、筆者が下線を補足した。

1) 目連聞曰：“此個名何地獄？”羅刹(刹)答曰：“此是刀山劍樹地獄”(679)

「これは何という地獄でしょうか」と目連尋ねれば、羅刹答えて「これは刀山劍樹地獄でございます」

2) 目連念佛若恒沙：“地獄元來是我家”。拭淚空中搖錫杖、鬼神當既倒如麻。(中略)“如來遣我看慈母、阿鼻地獄救波託”(689)

目連は恒沙の数ほど念仏申しつつ「地獄は元來我が

家なり」と涙を払って錫杖を空中にて振るに、鬼神らたちまち麻のごとく倒れ・・「如來われを遣わして母を見舞わしむ。阿鼻の苦患より救わんとてなり」

一人語りで何役も話し分けるのは無理があるが、せりふの出所を明言すれば、聴衆の頭は混乱しない。せりふ引用時に発話者と相手を明示する語法は、登場人物の交通整理にも似て、次第に定型化を促したと考えられる。上掲の如く「目連救母変文」のせりふ引用動詞句は、高頻度で現れる数タイプ以外に変種が多数あり、定型が更に多様化している様子が知れる。

せりふの交通整理にはもう一つ、せりふの主にも台詞の中で自分と相手を名乗らせる方法が採られる。例えば遠く目連救母説話の流れを汲むと言われる、日本の上方落語「地獄八景」の配役は、隠居・若旦那・閻魔大王・亡者たち・芸子・幫間・六道の辻や閻魔庁役人数名と延べ25人余りにのぼるが、一場面の登場人物は2、3人に限定される。噺家はせりふによって声色を使い分けると同時に、せりふ中で本人に名のらせ、話し相手の名前をこまめに呼ぶ。¹²⁾

それでは、せりふ引用に係わる呼称について具体的に報告をはじめめる。なお、登場人物のせりふ以外に現れる呼称は、本稿の対象外とした。

2. 人称代名詞

「目連救母変文」の呼称には、相手との人倫・身分関係を表す身分名詞が圧倒的に多く使われている。人倫・身分による呼称(身分名詞または指身詞と呼ぶ)は種類も豊富で、代名詞の約4倍のサンプル数を得られる。身分名詞は登場人物の役柄や発言相手との上下・親疎関係など、状況に応じて使い分けが細かい。敬称・謙称・自称あるいは直接呼掛け・間接指示の分担が明確なため、身分名詞により人物の関係を判断し、登場人物像が浮びあがるしかけである。

一方、変文が流行した時代には人称代名詞が使用範囲を広げ、“我”(一人称)“你”(二人称)が、古来の人称代名詞“吾”“汝”を数で凌いでいた。¹³⁾三人称も、かつての指事名詞“他”が人称詞として機能し始め、三人称代名詞の地位を確立しつつあった。しかし「目連救母変文」は、人称代名詞の使用率が低く、しかも用法に制約が多い。先に少数派の人称

2・1 一人称

一人称代名詞

| タイプ | | | (サンプル数) | (主な発話者と相手：→は発話相手を指す) | | |
|------|------|------|---------|-----------------------|---|---------|
| “我”類 | 自称 | 我 | 8 | 世尊、青堤夫人、獄主→目連 青堤夫人→目連 | | |
| | | 我等 | 1 | 罪人→目連 | | |
| | 直接呼称 | 我弟子 | 1 | 世尊→目連 | | |
| | | 我兒 | 2 | 青堤夫人→餓鬼 | | |
| | 間接呼称 | 我娘娘 | 1 | 目連→獄主 | | |
| | | 我身 | 1 | 目連→青堤夫人 | | |
| “吾”類 | 自称 | 吾 | 3 | 世尊→目連 | | |
| | | “自”類 | 自称 | 自 | 1 | 青堤夫人→餓鬼 |
| | | | | 自家身 | 1 | 青堤夫人→餓鬼 |

計20例

代名詞から見て行く。

自称の“我”は8例あり、人称代名詞中、唯一使用度が高い。“我”は“吾”とともに古来の一人称であるが、上古においては“吾”が主語、修飾語を担い、“我”は主として目的語の位置に着くという機能分担があった。中古漢語で“吾”が衰退をたどるのに対し、“我”は“吾”の機能まで取り込んで勢力拡大をはかったと考えられる。¹⁴⁾

「目連救母変文」は全体に硬い文体に属し、他の口語変文類に比べ文語の使用比率が高いのであるが、一人称代名詞に限っては“吾”の劣勢と、“我”の圧倒的優位を見て取れる。機能面でも“我”は、主語にも修飾語になっている(例文7)。二・三人称代名詞が寥寥なのに比べ、ひとり“我”の健闘が目立つのは、自称であることと関係が深い。自称は謙称語や卑称を用いる確率が高く、古風な“吾”が使いにくい場面に、“我”が浸透したと思われる。

“我”はまた、“我兒”“我娘娘”のように親族呼称の限定語(修飾語)としての用法が目立つ(例文7)。近代以前の中国語では、人称代名詞は尊称や謙称に不適なのであるが、“我”は身分呼称との複合形により使用範囲を広げ、口語系人称代名詞として再生したと考えられよう¹⁵⁾。

接尾辞“～等”の付いた“我等”が、三塗の川で罪人たちが自嘲気味に名乗る場面に見える。(例文3)“～等”は梵語仏典を漢訳する必要から生れた複数表現といわれ、元来単複の明確な区別を持たない中国語に、新たな表現法をもたらした。¹⁶⁾変文の時代

には複数形語尾として多用されるに至る。

3) 罪人總見目連、一切啼哭損雙眉：“弟子死來年月近、和尚慈親實不知。我等生時多造罪、今日受苦方始悔”(669)

罪人一同目連を見やりつつ、みな泣きじゃくり眉根をひそめ「われら死にて日も浅きため、和尚さまの母御とんと存ぜず。われら生前に罪業多く、只今の責め苦に始めて悔やみおる次第」

複数形代名詞は他例からも観察できるように、不慮な用法であり、卑称あるいは目下の者を指示する場合に限定される。

“吾”は釈迦や菩薩、長者など威厳のある人物のせりふだけに現れる。s.2614の“吾”3例はともに世尊の自称として使われている。役柄の特色を出すのに擬古文的手法を使うのは、漢訳仏典のそれと似ている。

4) 世尊喚言大目連：“且莫悲哀泣(泣悲哀)、世間之罪由(猶)如繩、不是他家尼(泥)碾來。火急將吾錫杖與、能除八難及三災。(687)¹⁷⁾

世尊の大目連にのたもう「泣き悲しむことなかれ、世人の罪は糾える繩の如く、因を他人がつくるにあらず。急ぎ吾が錫杖を授け与えん、これあらば八難三災を除くを得」

2・2 二人称

二人称代名詞

タイプ

(サンプル数) (主な発話者と相手：→は発話相手を指す)

| | | | | |
|------|------|-----|-------|------------------|
| “汝”類 | 自称 | 汝 | 1 | 目連獨白 |
| | 直接呼称 | 汝 | 8 | 世尊、菩提、長者、青堤夫人→目連 |
| | | 汝等 | 1 | 青堤夫人→餓鬼 |
| | 間接呼称 | 汝阿娘 | 3 | 世尊、長者→目連 |
| 汝母 | | 7 | 世尊→目連 | |
| 直接呼称 | | 阿你 | 1 | 獄主→罪人 |

計21例

直接呼称の“汝”は例文5)のように釈迦や長者、青堤夫人など年長者が目下を呼ぶせりふに見える。例文7)の“汝等”は、青堤夫人が餓鬼に向って吐く捨てせりふである。漢訳仏典で釈尊が弟子を呼ぶ“如等”に較べると、より俗語化している。

5) 長者報言羅卜：“汝母生存在日與我行業不同”(660)

長者は羅卜に申すよう「おまえの母は在世のころ、わしとは所行が別じゃった」

目連が母を“汝”“你”と人称代名詞で呼びかける例はなく、後述のように“阿娘”(お母さん)タイプの親族呼称を使う。目連が自問して自分を“汝”と言うせりふが一箇所見える。

6) 娘娘見今飢困、命若懸絲、汝若不起慈悲、豈名孝順之子？(710)

8) 刀山白骨亂縱橫 劍樹人頭千萬顆
欲得不攀刀山者 無過寺家墳好土
栽接(果)木入迦藍 布施種子倍家常
阿你個罪人不可説 累劫受罪度恒沙
從佛涅槃仍未出 (679~680)

刀山には白骨累々と散らばり 樹には人頭千万個
刀山に登らざらんと欲せば 寺の畑に肥え土を運び入れ
果樹を植えつけ接き木して 種を布施して寺有財産倍増に励むが一番
お前たち罪人でんで話にもならぬ 恒沙の劫を経つつ罪を受け
仏成道の日さえ苦海を出づること叶わぬ

羅刹が地獄の罪人を怒鳴る一段であるが、聴衆は演者に“阿你”と指呼され、同じ立場に立たされる。視聴者参加の手法に似て、観客は自身の罪業と檀家勤行を胸に問いたであらう。

“阿你”は当時の俗語で、接頭辞“阿”は外にも“阿誰”“阿耶”“阿娘”など主に単音節の指人名詞に付

母さまはいま飢えに苦しんで、命は危機に迫っておられる。今お前が慈悲を起こさなければ、どうして孝行者と言えよう

7) (青堤夫人) 見兒將得飯鉢來、望風即生吝惜。：“來者三寶、即是我兒、為我人間取飯、汝等令人息(心)。我今自寮(療)、況復更能相濟”(713)

(青堤夫人は)わが子が飯の鉢を持ち来たるを見まするや、その姿を見ただけで早や物惜しみの心を起こし、「こちらへ来られる三宝さまは、ほかならぬわが子、我が為に人の世で食を求めてきましたのじゃ。あんたがたはあきらめなされ。これは私が飢えを医すもの、人さまにまで分けてはあげられませぬぞ」
“阿你”が一例見えるが、無遠慮な直接呼称である。(例文8)単独の“你”はs.2614に例がない。¹⁸⁾

く。¹⁹⁾「目連救母変文」で“阿~”は相手への直接呼称に使われ、間接呼称とは結合しない。たとえば“慈母”は間接呼称専用語で、“我慈母”とは言えるが接辞“阿~”を付けた“阿慈母”の形はない。

2・3 三人称

三人称代名詞

(サンプル数) (主な発話者と相手：→は発話相手を指す)

| | | | |
|------|---|----|-------------|
| 間接呼称 | 伊 | 2 | 閻羅大王, 獄主→目連 |
| | 其 | 2 | 世尊, 閻羅大王→目連 |
| | 之 | 1 | 世尊→目連 |
| | 計 | 5例 | |

三人称はことに使用が限定される。指事用法の“他”はあるが、人を指す例は無い。罪人を指すともとれる用法が、一例のみ(例文9)に見えるが、例文10)と同様、無関心や放棄の語気に近い²⁰⁾。従って、純粹に三人称代名詞に使われる“他”を認めなくても差し支え無かろう。“他家”が1例あるが、「他人」の意味に使われていて、人称代名詞としがたい。(例文4)以上の理由から“他”を上表に入れない。

- 9) 河畔間(聞)他點名字, 胸前不覺沾衣裳(668)
河原で点呼に並ばされ、思わず襟は涙に湿る
- 10) 慈親容貌豈樞(甚)任, 長夜遭他刀劍侵(705)
慈母の顔容は見るにたえず、夜通し刀劍にさいなまれたもう

“伊”“其”“之”は、役人あるいは仏など、使用が上位者に限られている。“伊”は地獄の閻魔大王や獄主のせりふ専用で、“吾”と同様擬古文的用法であろう(例文11)。“其”と“之”は指事用法が多い(例文12)13)。釈迦・閻魔大王が目連・青堤夫人を指す用例が少数あるが、指事性は弱まっている

2・4 不定称

不定

タイプ

(サンプル数) (主な発話者と相手：→は発話相手を指す)

| | | | | |
|------|------|----|----|-----------------|
| “誰”類 | 間接呼称 | 阿誰 | 2 | 目連→獄主獄主、青堤夫人→目連 |
| | | 誰 | 1 | 青堤夫人→目連 |
| | | 計 | 3例 | |

不定人称代名詞は“誰”類のみ3例見える。“阿誰”は上記“阿你”などと同じく、人称代名詞“誰”に接頭辞“阿”が付いた俗語であるが、ともにせりふに現れる。例文14)は七七の韻律内に“阿誰”を配すことから見て、“阿”は短く発音され、“誰”と緊密に結合して一語化していた様子が窺えよう。“誰”の例は例文22)を参照。

- 14) 獄主擎叉便出來“和尚欲覓阿誰消息?”(692)

(例2)3)²¹⁾。“此”は多数あるが、人称代名詞と見なせる用例はない。

- 11) 獄主報言：“獄中罪人生存在日，侵損常住遊(淤)泥迦藍，好用常住水果，盜常住柴薪。今日交伊手攀劍樹，支支節節皆零落”處。

獄主答えて、「獄中の罪人は、世に在りし時、寺の財産をくすね、田畑迦藍を壊し、境内の木ノ実を盗み食いし、薪木を盗伐しておりました。いま劍樹に登らせられ、手足ばらばらに断ち切られるところでございます」という場面

- 12) 爾時世尊報目連曰：“汝母已落阿鼻・・十方衆僧解下(夏)勝脱之日，以衆力乃可救之”(644)

そのとき世尊の仰されるよう「汝の母は阿鼻地獄に落ち・・十方僧衆の解夏勝脱の日だけは、衆力によって救うことができる」

- 13) 世尊當閻羅ト説、知其正直不心邪(645)

世尊は羅トの言を聞こしめすや、素直にして邪心なしと知りたもう

獄卒は叉を手にして出で來たる「和尚さまのお尋ねなは誰の消息なりや」

- 15) 獄主啓言“和尚緣何事開地獄之門?”(目連)報言：“貧道不開阿誰開?世尊寄物來開”(696)

獄主、和尚に申し上げるよう「どうやって地獄の門を開けなされました」拙僧が開けたのでなければ誰が開けましょう。世尊よりお借りしたもので開けました」

3. 身分呼称

使用が限定的な人称代名詞に対し、身分名詞は大量に現れる。「目連救母變文」のせりふで最も使用回数が多い指身詞は“阿娘”（お母さん）で27例ある。同義語の“娘娘”（8例）“娘”（2例）“娘子”（1例）“耶娘”（1例）と、“慈母”（12例）も加えると51例となり、母を指す親族呼称だけで呼称全対の1/4近くを占めている。

3・1 人倫名詞

人称代名詞“汝”“你”で母に呼びかける例が皆無

人倫名詞

| 呼称種類 | 語彙 (サンプル数) | (主な発話者と相手：→は発話相手を指す) |
|------|---------------------|----------------------|
| 自称 | 阿娘 | 2例 青堤夫人自称 |
| | 娘娘、娘子、娘 (各1) 耶娘 (2) | 5例 上同 |
| 直接呼称 | 阿娘、娘娘 (各5) | 10例 目連→青堤夫人 |
| | 孝順兒 (2) 孝順子 (2) | 4例 青堤夫人→目連 |
| 間接呼称 | 阿娘 | 20例 目連→青堤夫人、長者 |
| | 娘娘 (3) 娘子、娘 (各1) | 5例 目連→獄主 |
| | 慈母 (12) 慈親 (5) | 17例 目連→世尊 罪人→目連 |
| | 母 (1) 母子 (1) 耶娘 (2) | 4例 目連→夜叉 |
| | 阿耶 | 2例 青堤夫人→目連 |
| | 兒 (7) 兒子 (1) | 8例 獄主→目連 青堤夫人→獄主 |
| | 二親 | 1例 目連→世尊 |
| | | 合計76例 |

身分呼称は直接呼掛けか間接かで役割を異にする語が多い。“孝順兒(孝順子)”は直接呼称に、(例文21) 22) “慈母”“慈親”“母”“阿耶”“兒子”は間接呼称に使用される(例文18) 19))。主な身分呼称の使い分けはおよそ次のようになる。

自称・他称 (直接・間接) 兼用

阿娘、娘娘、娘子、娘、耶娘

直接呼称専用 孝順兒、孝順子

間接呼称専用 慈母(慈親)(母)、(兒子)

16) 目連啓言：“阿娘，人身難得，中國難生，佛法難聞，善心難發。”喚言：“阿娘，今得人身，便即修福。”(717)

目連申すよう「母さま、人身はえ難く、中国には生まれ難く、仏法は聞きがたく、善心は発しがたと申します。」(目連声高に)「母さま、いま人身を得られたからには、これから修福に勤めましょう」

17) 目連既見娘娘別，恨不將身而自滅。舉身自撲太

であることと較べれば、当時のせりふにおける身分名詞使用の優位が知れよう。身分名詞の多用は当時の家族社会と階級社会の反映でもあるが、一方で中国語の呼称習慣を語っている。中国語の人倫名詞は現代語でも多用され、多く直接呼掛けにも使える。

「目連救母變文」のせりふにもほぼ同様の使い分けが見られる。以下、せりふに見える身分名詞を、家族内の長幼・上下関係を表す人倫名詞と、社会的地位や上下関係を表す職位名詞に分けて、²²⁾ 実例を見て行くことにする。

山崩，七孔之中皆灑血。啓言娘娘：“且莫入，回頭更聽兒一言。母子之情天生也、乳哺之恩是自然。兒與娘娘今日別，定知相見在何年？”(699-700)

目連母の別れ行くを見て、われとわが身を害めんばかりの無念さ、五体を地に投じて泰山の崩るるがごと、七つの孔より血潮ほとばしる。申すよう「母上、しばし(地獄に)入るのをお待ちあれ、こちら向き、我が申すことお聞きあれ。母子の情は天生のもの、母の御恩は人倫の自然。私と母様が今日別れしうえは、次に相会うはいつの年ならん」

18) 目連啓言慈母“由兒不孝順，殃及慈母墮落三途，寧作狗身於此，你(寧)作餓鬼之途？”(717)

目連が慈母に申すよう「私が親不孝のため、母上に禍を及ぼし、三途に落ちてしまわれましたが、いっそこで犬の身で生きられますか、それとも餓鬼道に行かれますか」

19) (目連) 諮白世尊：“慈母何方受於快樂？”(644)

(目連) 世尊に申し上げるよう「母はいずこにて快樂を受けておりましたか」

20) 阿娘喚言：“孝順兒，受此狗身暗啞報，行住坐臥得存”(717)

母の申すよう「孝行息子や、こうして犬の身になって、口のきけない身になっても、行住坐臥、命は無事です。」

21) (青堤夫人) 即作人語言：“阿娘孝順子，忽是能向地獄冥路中救阿娘來，因何不救狗身之苦？”(717)

(青堤夫人) 人の言葉で申すよう「母さんの孝行息子よ。地獄冥途で母さんを助けられるくらいなら、どうして犬のこの身を救うてくれぬ」

“耶娘”は「父母」の意味であるが、実際は「母」の意味に代用される例が次に見える。

22) 青堤喚言：“孝順兒，罪業之身不自亡。不得阿師行孝道，誰肯辛救耶娘”(714)

青堤夫人は声をかけ「孝行息子よ、この罪業の身はこのままにては滅し得ず。お坊さまの孝養なからんには、誰か苦患より母を救ってくれん」

父(長者)はこの物語でわき役のため、父子の会話数は少ないが、呼称の使い方は、父と母で違いが明白である。母には“阿娘”などの人倫代詞が頻用されるのに対し、「父さま」を意味する“阿耶”は2例のみ、しかも私的な場面での間接呼称で、呼びかけの例はない。父に対して、公的な場では職位名詞“長者”が使われる。(例文24)26)子が父を、妻が夫

を直接「父さま」と呼べる場面は少なく、間接呼称も敬語の身分代名詞を用い、人倫代名詞は極く私的な場面に限られる(例文23)。

23) 天堂獨有阿耶居，慈母諸天覓綜無(665)

天堂にはただ父のみいまし、母は諸天のいずこにもいまさず

3・2 職位名詞

せりふに最も多く表れる呼称は職位名詞で、呼称に占める割合は人倫名詞を上回る。一見して仏教起源の職位名称が多い。主人公目連は自らを“貧道”と名乗り(例文25)26)、釈迦に“世尊”“如來”と呼びかけ(例文28)、釈迦の前での自称はすべて“弟子”となる。仏教界の職位・職称を用い、問答形式が似るのは、仏教故事変文という物語りの性格のためと、変文の作者や書写生たちに仏説に信奉帰依した者が多いことも起因しよう。²³⁾また変文の時代には“君”“臣”の使用頻度はすでに大幅に減少しているにも拘らず、「目連救母変文」ではこうした伝統的職位呼称もまま見える。

P.2319には“貧道”に替って謙称の一人称“某甲”“某乙”(「それがし」)につくるところがあるが、²⁴⁾s. 2614には用例を見ない。s. 2614はより古い(文体の)抄本と見られる。

| 語彙 | (サンプル数) | (主な発話者と相手：→は発話相手を指す) |
|------------|---------------|----------------------|
| 自称 | | |
| 弟子 (11) | 佛弟子 (2) | 13例 目連、罪人→世尊、獄主、夜叉 |
| 貧道 | | 18例 目連→長者、大王、獄主、罪人 |
| 臣 (1) | 君 (1) | 2例 目連→世尊 |
| 罪身 | | 3例 青堤夫人→獄主 |
| 直接呼称 | | |
| 世尊 (6) | 如來 (2) 佛 (1) | 9例 目連→世尊 |
| 和尚 | | 18例 長者、大王、獄官、罪人→目連 |
| 闍梨 | | 7例 長者、大王、將軍→目連 |
| 賢者、阿師 (各1) | 三寶 (3) | 5例 目連→罪人 青堤夫人→獄主、目連 |
| 弟子 | | 1例 大王→目連 |
| 獄主 (7) | 大王 (1) 大將 (1) | 9例 目連→獄主 |
| 間接呼称 | | |
| 世尊 (1) | 釋迦如來 (1) | 2例 目連→夜叉、獄主 |
| 如來佛弟子 | | 1例 青堤夫人→目連 |
| 闍梨 (1) | 阿師 (1) | 2例 將軍→世尊、獄主→目連 |
| 長者 | | 2例 目連→長者 |
| 合計93例 | | |

“長者”は例文24)のように権勢者・有力者の汎称である。例文25)～26)の“長者”は目連の父を指すが、間接呼称とすべきで、諸校本が目連の直接呼掛けとして{啓言：“長者相識否？”}とする標点を、筆者が改めた。

24) 阿娘喚言：“孝順兒，・・朝聞長者念三寶，莫(暮)聞娘子誦尊經”(717)

母の申すよう「孝行息子や・・朝は長者が三宝を念ずる声を聞き、夕べは奥様がお経をを上げる声を聞きます」

25) 目連啓言長者：“貧道阿娘亡過後，魂神一往落阿鼻(後略)”(710)

目連長者に申すよう「拙僧の母は身まかりしのち、魂はまっしぐらに落ち・・」

26) 長者出來而共語，合掌先論中(忠)孝情，啓言長者：“相識否？貧道南閻浮提人，少小遭父母喪(後略)”(655)

長者出て来て語らうに、(目連)合掌して先ず孝心あふるる言葉にて長者に申すよう

「見知りたもうや。拙者は南閻浮提の者、幼くして父母に先立たれ・・」

s. 2614で目連と母親がせりふを交わすのは、青堤夫人が地獄に落ちて以後の場面に限られている。そのためか青堤夫人は息子を、公の場では格の高い“三宝”“阿師”“賢者”と呼び(例文7)、自らは“罪身”と卑稱する(例文27)。

人倫代名詞“孝順兒”“兒”が使われるのは、母子水入らずの対話である。聴衆は呼称の使い分けて、目連母子の微妙な情感まで聞き取ったであろう(例文18) 20)～22)。

なおs. 6269「目連變文」には目連を呼んで“聖者”“尊者”が使われるが²⁵⁾s. 2614には見えない。p. 2193「目連縁起」には現世での会話場面があり、母親が息子を“汝”と呼ぶ場面がある。

27) (獄主)“第七隔中有青堤夫人已否？”“若看覓青堤夫人者，罪身即是。”“早個緣甚不應？”(696)

(獄卒は)「第七の隔に青堤夫人はおるか」と聞けば「もし青堤夫人をお尋ねなら、罪身(わたくし)がそうでございます」

目連は仏や地獄の役人・諸王に対しても、それぞれ職位名詞を使い分ける。

28) 目連見阿娘飢，白言：“世尊，每月十三、十四可不得否？”(716)

目連は母の飢えを目にして、申し上げますには「世尊よ、毎月の十三日、十四日ではいけないのでしょうか」

4. 小結

以上、「目連救母變文」のせりふに現れる呼称を人稱代名詞、身分呼称(人倫名詞、職位名詞)に大別し、さらに小類に分けて、各々の統計数と具体的使用例を見てきた。1資料に限定されているとはいえ、せりふの豊富な抄本であり、サンプルもかなりまとまった数になる。代表的仏教故事變文の呼称を抽出できたと思う。

個別の呼称についてはすでに各章で述べたので、呼称用法全般について付言し、簡単なまとめに替えたい。

呼称を語形によって便宜的に文語系、口語系、代名詞+身分名詞の3タイプに分け、呼称に使われる言葉の「鮮度」を調べる。代名詞+身分名詞を独立させたのは、使用範囲に制約の多い代名詞が口語系身分名詞と結合した新タイプと考えるためである。それぞれ以下のような語例を配当したが、分類困難なものも多い。例えば“我”は古来の人稱代名詞であるが、變文の時代は口語系代名詞に活用されており、文語系としない。“兒子”を口語系に、“兒”は文語系としたが、明確な基準はなく、接尾辞“～子”が付いた形を便宜的に口語系としたまでである。職位名詞の“和尚”“貧道”“長者”などは魏晋南北朝以来の仏教盛時における常用口頭語とみなし、口語系に分類した。よって統計はおおまかな傾向を示すに過ぎないが、口語系呼称が文語系の約2倍あること、その中心を占めるのは身分名詞であること、一人称・二人称代名詞が身分名詞と結合した呼称が相当数あることを観察できよう。

| 語形による呼称分類 | 語例 |
|-----------|-------------------------------|
| 文語系 | 吾、汝、慈母、母子、二親、兒、臣、君、世尊、如來、賢者・・ |
| 口語系 | 我、阿娘、娘娘、阿耶、兒子、阿師、和尚、貧道、長者・・ |
| 代名詞+身分名詞 | 我弟子、我兒、汝阿娘、汝母・・ |

| 人稱タイプ | 文語系 (例数) | 口語系 | 代名詞+身分名詞 | 小計 | 計 | |
|-------|----------|-----|----------|----|-----|----|
| 人稱代名詞 | 一人稱 | 4 | 9 | 7 | 20 | 49 |
| | 二人稱 | 9 | 1 | 11 | 21 | |
| | 三人稱 | 5 | 0 | 0 | 5 | |
| | 不定稱 | 0 | 3 | 0 | 3 | |
| 身分名詞 | 人倫名詞 | 32 | 44 | 0 | | 76 |
| | 職位名詞 | 18 | 75 | 0 | | 93 |
| 合計 | 68 | 132 | 18 | | 218 | |

小結：

- 1・「目連救母変文」のせりふは、呼称の使用頻度が高く、定型伝達動詞がせりふを引用する。
- 2・身分名詞呼称の使用頻度が極めて高く、なかでも職位名詞が常用される。身分名詞は直接呼称か間接呼称かで、多く使い分けがある。
- 3・口語系の職位・人倫名詞が文語系に替わって多出する。
- 4・人稱代名詞の使用は、身分名詞の4分の1弱にすぎない。三人稱と不定稱は指事代名詞用法を引きずり、人稱詞としての独立が不完全である。
- 5・人稱代名詞は古系も健在で、口語系は単独での使用がごく限定される。
- 6・人稱代名詞は人倫・職位名詞と結合するか、或いは接頭辞を加えるなどの複合形が増加する。

既述の如く、当変文は敦煌文学作品の中では比較的硬い文体の作品に属するが、呼称法から見れば、時代の風を受け、意欲的に新しい待遇表現を取り入れている。一部文語系呼称の踏襲は、仏教説話中の人物特色を鮮明にするための擬古的手法と考えられる。

変文の舞台である俗講は、寺院経済にも寄与するほどの人気興業であった。口演の巧拙はイベントの成否を大きく左右し、プロの説教師たちは台本にアドリブや脚色を加え、肉声の話術で信者たちを圧倒したにちがいない。音声資料が残らない口承文芸は、上演状況の推測が難しい。現存する「目連救母変文」には、系統の異なる「目連変文」まで含め、相当数の上演用台本があったと思われ、当時の流行の著し

かったことが窺える。

目連救母説話は、のちに宋代宝卷や明清地方劇に吸収発展する過程で、地獄巡りやアクロバット、懸梁自尽を見せ場にする大衆芸能へと演変する。中国大陸では一時期、宗教的理由で出版・上演禁止にあり廃れたが、最近また「目連戯」の再演が各地で活発化していると聞く。²⁶⁾

洋の東西を問わず、視聴覚器材の発達で話芸が衰退するのは中国も例外ではないが、そのスタイルは今も大衆小説や戯曲が受け継いでいる。近来ふたたび語りの芸能が見直されているが、その魅力は、聴衆と演者が直に芸術体験を共有する点にある。一瞬の間に現前する天界と地獄、獄卒たちの口荒らな会話、目連の母の哀訴のリフレインが、演者の口から繰り出され、聴衆はドラマに手繰り寄せられてゆく。ドラマの伝達経路が一本化している分、演者の創る内世界が迅速に形成されたに違いない。直接話法のせりふと豊富な呼称法は、せりふに息を吹き込み、人物を登場させるためのドラマ演出の必要から生まれ、成長が促されたと言えよう。せりふに現れる大量の新しい職位・人倫名詞や“阿你”“汝等”など口語用法の呼称からも、時代感覚を取り入れようとする口演者の創意が窺える。

<注>

- 1 目連救母変文に関しては〈主要文献目録〉の1、i、j、4、10~14がそれぞれ解説をのせる
- 2 目連救母変文の形成流布に関する論著は「文献目録」10~17参照
- 3 The Hell Stein no. 2614, in British Musium S. 2614は最も長編かつ首尾完全な抄本。総字数約9300字。削字、補字、返り点など細い対校の跡がある。
- 4 広義の「変文類」「敦煌変文」等には講唱の体裁をとらない散文体や韻文体も含める。ここでいう狭義の「変文」は講述・吟唱を前提にして綴られた、或いはそれに比較的忠実に抄写された話本を指す。変文とその上演形式に関しては〈主要文献目録〉2、16、17、18を参照
- 5 目連救母変文の諸本は以下の抄本がある。ただし目連縁起・台北本などストーリーを大きく異にするものは含めない。
ロンドン本 s. 2614 s. 3704
パリ本 p. 2319 p. 3485 p. 3107 p. 4988
北京本 盈字76 麗字85 霜字89 成字96
- 6 川口1984、金岡照光1972、1992参照
s. 2614は標題下に絵説き用の変相図が付いていた記述が残る。川口1984pp. 46-48によるとs. 2614の第8葉は転写後、写本の一部を切断し、韻文を削除後、新たに絵とき用散文を継ぎ足した痕跡があるという。各諸本間での字句の異同では、例えばp. 2319など大幅に韻文を省略する抄本がある。
- 7 〈主要文献目録〉の1に校勘類10種を挙げた。
- 8 例文26) では項楚1989、入谷1983訳ともに“長者”を目連の呼掛けの語と解すが、“長者”は一般敬称で直接呼びかける例を見ない。伝達動詞“啓言”の賓語ととるのが妥当であろう。
また例文18) では項楚1989、入谷1983訳ともに“慈母”を目連の呼掛けの語と解すが、“慈母”は間接親族呼称で直接呼びかける例を見ない。伝達動詞“啓言”の賓語ととるのが妥当であろう。句読の誤りは他にも例文4) 等、外にも多い。
- 9 桂米朝1981の述懐によると「(「地獄八景」は) あほみたいな長い話。30代からやりだしたが、この年になるとしんどくなって命がけ。」p. 82
- 10 佐々木1994 p. 25-44
- 11 原田1992 p. 91
- 12 桂米朝1993「特選ノ米朝落語全集」所収「地獄八景亡者戯」の一場面。娑婆の大金持ちの若旦那が馴染みの芸子や舞子を引き連れて登場する段の呼称を見てみる。
下線は筆者。せりふの発話者名は口演では省かれるが、声色を使い分けている。同上CDから筆者が文字に起した。
一八「さあさあみな早うこいよ早うこいよ。…若旦那ちょっと待ったんなはれ女子連中遅れてんまんのや、なにをぐずぐずしてんのや。早うこい。」
芸伎「そない言われたかて、わてらもうこんな裾模様のごんな着物着てて、そな早う歩かれしまへんやなかい。ちょっと待ってもらわんことには・・・」
舞子「わてらそな早う歩かれたらかなわんわ。」
科白(舞子はんのピラピラのかんざしが風に揺れてるところで)
一八「早うこいよ早うこいよ。若旦那・・・なにがやなあんたないをみんな遅れてんがやな、あんた難しい顔してとつととつと、なんでそんな急がななりませんのや。」
若旦那「ああ、えらいすまなんだな。いやわしは別に・・・」
- 13 吳麗君1993 p. 165~169
- 14 同上によれば変文では“我”が“吾”の7倍弱あり、優位を占めるという。
- 15 呂叔湘1985 p. 34~36, p. 38~45の身分名詞の挙列に同様の形式が多くある。
- 16 “~等”は晋代以降、梵語の双数を漢訳するための複数人称代名詞接辞であったが、複数形に頻繁に用いられ、漢語として定着したという。

朱慶之「漢語佛典語文中的原典影响初探」

『中国語文』1993 5期

- 17 この一段は句読に諸説ある。項楚1989、入谷1983
訳その他の校勘は“大目連”を世尊の直接呼掛
けの語とするが、“大目連”は敬称で直接呼びか
ける例を見ない。伝達動詞“喚言”の賓語とと
るのが妥当で、標点を改めた。
- 18 s. 2614の“阿你”をp. 2319は“你”とする。ま
た例文18)に“你”の字がみえるが、“寧”の
当て字としてカウントしない。中古音の規範韻
書である『切韻』に従えば“寧”はローマ字表
記でnieg、“你”はnieiと韻尾が異なるが、唐末
以降、敦煌や長安等一帯の中国西北部の方言で
鼻韻韻尾の後退もしくは脱落現象が報告されて
おり、“寧”の発音も“你”と接近していた可能
性も考えられる。項楚1989 (p. 719注12)は“音
誤”とする。
“你”を“寧”の当て字とし、音通仮借字と扱
わないのは、西北方言の鼻韻韻尾後退現象は、
資料の質・性格・出所などにより均一ではない
ためである。
- 19 太田1988 p. 451 志村1984 p. 36
複音節名詞を後置するものも挙例にあるが、少
数例外とする。
- 20 太田1988 p. 118~120
- 21 呂叔湘 1985 p. 28~32
- 22 身分・人倫・職位名詞等の述語は呂叔湘1985 p.
38~45によった。
- 23 金岡照光1972 p. 169~175
- 24 変文に常見の呼称で、一人称のほか不定三人称
「だれそれ」という意味にも使われる。当時の
新しい口語呼称法であった。呂叔湘1985 p.
45~47 太田1988 p. 150 志村1984 p. 41
- 25 s. 6269「目連救母変文」抄本による。
- 26 鈴木1993参照

<主要文献目録>

1. 「目連救母変文」校本

- a) 王重民『敦煌変文集』上下 1958人民文学出
版社
- b) 周紹良『敦煌変文匯録』1969 宏智書店
- c) 潘重規『敦煌変文集新書』1983中国文化大学

中文研究所

- d) 劉堅『近代漢語讀本』1985 上海教育出版社
- e) 劉堅、蔣紹愚『近代漢語語法資料匯編』1990
商務印書館
- f) 項楚『敦煌変文選注』1989巴蜀書社
- g) 項楚『敦煌文学叢考』1991上海古籍
- h) 郭在貽『敦煌変文集校議』1990岳麓書社
- i) 入谷義高「目連救母変文」中国古典文学体系
卷60『仏教文学集』所収1975平凡社
- j) 川口久男『大目乾連冥間救母変文』1984
大東文化大学東洋研究所『敦煌資料と日本文
献』
2. 金岡照光『敦煌の民衆—その生活と思想—』1972
評論社
3. 金岡照光『仏教漢文の読み方』1978春秋社
4. 金岡照光「敦煌の文学と言語」1992
『敦煌の文学文献』大東出版『講座敦煌』
5. 志村良治『中国中世語法史研究』1984 三冬社
6. 太田辰夫『中国語史通考』1988 白帝社
7. 呂叔湘『近代漢語指代詞』1985学林出版社
8. 原田寿美子「直接引用と間接引用に関する二、
三の考察」『中国語学』239号 1992
9. 吳麗君「『敦煌変文集』中的人称代詞」『語言学
論叢』18輯 1993
10. 岩本祐『目連伝説と孟蘭盆』法蔵館 1986
11. 金岡照光「目連変文」『中国の名著』1961頸草書
房
12. 宮次男「目連救母説話とその絵画—目連救母経
絵の出現に因んで—
『美術研究』255号第5冊 1967 吉川弘文館
13. 永井義憲「説話の移植と其変容」『大正大学学報』
1950 37集
14. 鷹巣純「目連救母説話図像と六道十王像」『仏教
芸術』203号 1992毎日新聞社
15. 鈴木靖「国際交流すすむ中国の地方劇」研究ノ
ート『法政大学教養部紀要』第85号 1993
16. 鄭振鐸『中国俗文学史』1978商務印書館 上海
書店1984再版 台湾商務印書館1986年
17. 孫楷第『俗講説話与白話小説』1956 作家出版
社
18. 那波利貞『俗講と変文』(上、中、下)『仏教史
学』1:2-4 1950,1,6,10
19. 小川陽一「変文の構造」『集刊東洋学』東北大学

中国文史哲学研究会 3期 1960

20. 関山和夫『説教の歴史』—仏教と話芸— 1978
岩波新書
21. 佐々木健一『せりふの構造』1994 講談社学術
文庫
22. 桂米朝『米朝落語全集』第4巻 地獄八景亡者
戯 1981 創元社
23. 桂米朝『特選ノ米朝落語全集』第15集 (CD)
地獄八景亡者戯 1990 東芝EMI